

2022年5月25日

資料館通信 第81号

ふじみ野市立

上福岡歴史民俗資料館
大井郷土資料館

埼玉県ふじみ野市長宮1-2-11
埼玉県ふじみ野市大井中央2-19-5

TEL 049-261-6065
TEL 049-263-3111

板碑

鎌倉・室町びとの祈り
(上福岡編)
令和4年5月29日(日)まで

はじめに

令和4(2022)年の大河ドラマでは鎌倉時代が取り上げられているように「中世」が注目されている。資料館では、中世を象徴する板碑という石造物を取り上げ、特に中世の人々の息づかいが感じられる銘文が刻まれたものに注目して展示した。展示品の板碑の中には小さな破片もあるが、その破片からも中世の人々の願いや祈りに触れることができる。

第1回学習講座「下里・青山板碑製作遺跡」について」を実施！

企画展開催にちなみ、第1回学習講座として、5月21日(土)午後1時半から元小川町教育委員会で文化財担当者としてお仕事をされてきた高橋好信先生をお招きして、板碑の産地である製作遺跡から板碑がどのようにつくられたかお話をうかがいました。

小川町内の分布調査で確認された19か所の板碑製作遺跡のうち、割谷遺跡の発掘調査の様子を中心にお話をうかがった。板碑未成品の発見や板碑の石材を切り出した工具の跡などが確認された様子に参加者の皆さんが熱心に聞き入っていた。



学習講座講義風景

(1) 板碑のはじまりと市内の板碑の分布

板碑とは？

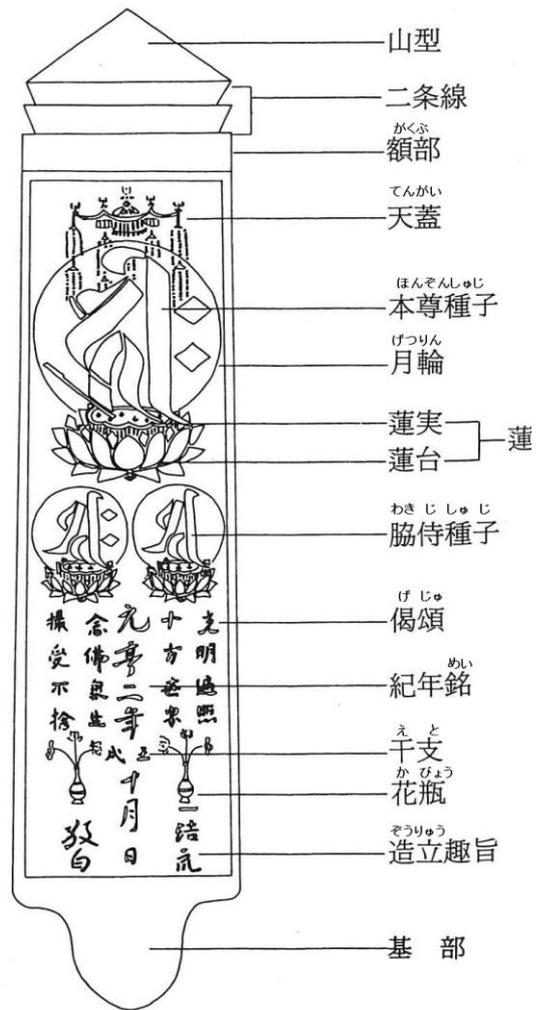
板碑は、全国的に分布が確認されている中世特有の石塔であり、石材を板状に加工し、上部には、信仰の対象である仏を種子(梵字)や漢字、図像等で刻み、下部には、紀年銘(元号)やどのような願いをこめて供養しているのか、それにかかわる人名が刻まれる。特に東京都、埼玉県を中心とする関東地方に分布する板碑は、秩父市、小川町、長瀬町付近で採取される緑泥片岩を使用するのが特色で、武蔵型板碑として知られる。

板碑は、鎌倉時代から南北朝時代(13世紀～14世紀)ころ、武士のような有力層で亡くなった方の死後の冥福を祈って供養するために立てられた事情から、2m前後から5mに達するような大型のものが立てられた。室町時代半ばから戦国時代ころにかけて、1m前後からそれ以下のような小型のものが増加するとともに、共通の信仰を持つ村人たちが共同で立てる結衆板碑がつくられるようになった。また来世や現世の幸福を祈って立てる場合には、「逆修」という銘文が刻まれたり、禅門、禅尼など庶民階層の法名(戒名)と考えられるものが増える。

上福岡地域では、川崎、長宮、滝、駒林地区の墓地に立てられているのを見かけるが、長宮、滝、駒林遺跡の発掘調査によっても井戸などに捨てられた状態で発見される場合がある。

なお、板碑の呼称について、著名な板碑研究者の千々和到氏によると建立当時は定まった呼称はなく、石卒塔婆と呼ばれる場合があったとされ、板碑の呼称が成立したのは江戸時代後半頃であるとする。

板碑模式図(『埼玉県板石塔婆報告書』より一部改変)



板碑の始まり(13世紀)

この時期の板碑の特徴は、一部の例外はあるが、厚手で大ぶりであることである。もっぱら有力な武士の供養塔として建てられたとされるのがこの時期の板碑で、厚さ3cm以上、幅30cm以上、高さ1m以上で、2mを超えるものものも珍しくない。

そのほか、

①主尊種子と紀年銘のみ、そこに加えて脇侍がくわわるシンプルなものが多い

②山型の頂角が直角に近いものが目立つ

などの特徴がある。市指定文化財の正元元年(1259)年銘の「市内最古の板碑」も主尊種子と紀年銘のみだが、幅が54cm、厚さ10cm、頂角が98度と初期板碑の特色を示し、本来は現在(98cm)の倍の高さを持っていたと思われる。また地藏堂旧在の阿弥陀三尊種子板碑も幅40cm、厚さ6.2cmに達し、種子の位置関係から本来の全長は現在(87cm)の倍以上はあつたと推定できる。

(2) 駒林中世墳墓

1965年に確認された長径4m、短径2mの範囲で長径20cmほどの川原石を一面に葺石として用いた板碑を伴う集石墓。確認調査時には板碑の基部破片(報告者は「根の部分」と表現)が立ったまま確認された。葺石のなされた盛り土は、最も高いところで30cmほどで、盛り土を除去したところ須恵質もしくは古瀬戸の蔵骨器と思われる陶器破片と小骨片が確認された。このような集石墓は、行田市の藤の宮遺跡や静岡県磐田市の一の谷中世墳墓群にもみられる。なお確認調査の前後には、3基の板碑が確認されており、当時の本来の位置が保たれてきた貴重な事例である。



地藏堂旧在の阿弥陀三尊板碑(鎌倉時代後期)

14世紀の板碑

鎌倉時代末～南北朝時代に該当する時期で、南北朝期のものは北朝の元号が刻まれている。仏典の引用である偈頌は、14世紀初頭にあらわれるが、光明真言は、旧上福岡地域では14世紀後半にあらわれる。供養者の名前と逆修ぎやくしゅうという生前供養をあらわす板碑も現れる。高さは、60cm以上で1mを超えるものが通例であるが、元享三(1323)年銘のもの以降、幅が30cmを超え、厚さが3cmを超えるものは例外的となり、幅は、15～29cm、厚さは1.5～2.5cmほどのものが大部分となる。



駒林中世墳墓(鎌倉末～南北朝期の集石墓で、中央部に蔵骨器があり、板碑が立てられていたと思われる。)

(3) 偈頌と真言に刻まれた願い

偈頌について

偈頌とは、仏教の経典などから仏の徳をたたえる詩句を抜き出したもので武蔵型板碑の特徴の一つとされる。埼玉県内では、昭和56(1981)年時点で板碑全基数のうち5.3%のものに刻まれているとされるが、発掘調査によって増加しているものと考えられる。旧上福岡市域では、6種類の偈頌が確認され、平成12(2000)年時点で全体の7%ほどにあたる12基で見られるとされる。

「光明遍照」偈

全文は「光明遍照 十方世界 念仏衆生 摂取不捨」(無量寿仏の光明は、あまねく十方世界を照らし、念仏を唱えて[信仰する]衆生(人々)を摂取して捨てない)であり、浄土三部経のひとつである「観無量寿経」を出典とし、阿弥陀如来の功德をたたえるものである。旧上福岡市域では、14～15世紀初頭に見られる。

「每自作是念」偈

全文は「每自作是念 以何令衆生 得入無上道 速成就仏身」(「仏は」どうすれば人々を最高の教えに導き、一刻も早く仏になることができるだろうか」と常に念じている。)であり、「法華経如来寿量品 第十六」を出典としている。

「十方仏土中」偈

全文は「十方仏土中 唯一乘法 無二亦無三 除仏方便説」(十方の仏土のうちには、ただ一乗の法だけがあるので、二乗もまた三乗もない。例外的に方便をもって仏法を説くことがあっても、ただ一乗の法へ導くためである)であり、「法華経方便品第二」を出典としている。



延慶二年(1309)銘阿弥陀三尊種子板碑(駒林中世墳墓出土。「光明遍照」偈が刻まれる。)



板碑片(「毎自作是念」偈の一部が見られる。)

せ ほうじゅうほう い

「是法住法位」偈

全文は「是法住法位 世間相常住」(この法(真理)の持続性、法の位は 世間においては不動である)であり、「法華経方便品第二」の未来仏章の一部を出典としている。上福岡例のほかには、鴻巣市、川越市などに三例あるのみで類例が非常に少ない。

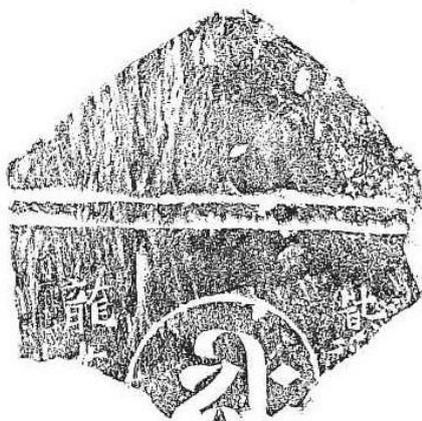
かいようけん ひ

「皆遙見彼」偈

全文は「皆遙見彼 龍女成仏」(皆遙かにかの龍女が成仏するのを見た)であり、「法華経堤婆達多品第十二」を出典とする。法華経の女人往生を確証するものとして用いられる。富士見、川越、浦和、上尾市域に分布し、15世紀末～16世紀初頭のこの偈頌に伴う法名はすべて女性である。

光明真言について

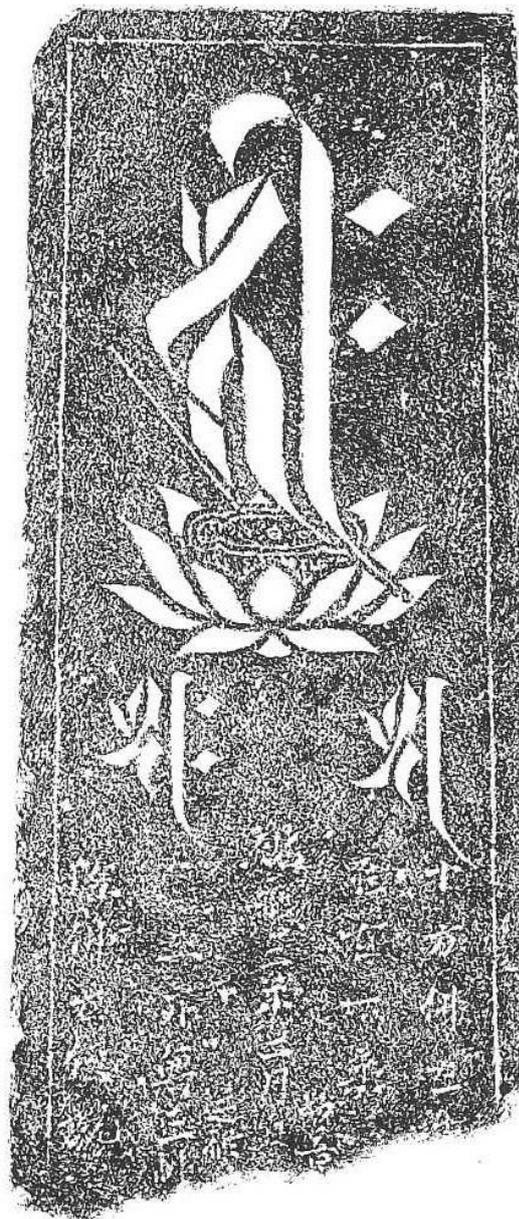
真言とは、真実を伝える仏や菩薩の言葉とされ、密教の信仰にもとづき発達した呪文である。真言の種類は数多いものの、板碑に刻まれるものは光明真言が圧倒的に多く、ほとんどが梵字によってあらわされる。光明真言は、「不空大灌頂光真言」ともいい、この真言をとなくて、仏の加護を祈って、清めた土砂を死者にかけると、一切の罪障を除いて四方極楽に往生させると説かれ、追善供養ばかりでなく、逆修供養においても用いられた。



板碑片(川崎遺跡出土。「皆遙見彼」偈の一部がみられる。)

真言が、板碑にあらわれるのは、大日真言であるキャ・カ・ラ・バ・アが建長年間(1250年代、13世紀中葉)に、また最も普遍的にみることのできる光明真言が文永年間(15世紀初頭)に出現している。偈頌に比べると後発ではあるが、その後、偈頌を圧倒するかのようになり、各時期を通じて採用されている。昭和56年時点で県下の板碑の約8.5%にあたる1735基に確認される。

なお、光明真言は一般に二十四文字の梵字を二行あるいは四行であらわされるが、後には月輪状、天蓋状、また枠線状に配するなど、その刻み方自体荘厳化する傾向が認められる。旧上福岡地域においては、貞治五(1366)年銘を初見として17基の板碑と駒林安楽寺の応安七年(1374)銘宝篋印塔基礎部に確認されている。



観応二年(1351)銘阿弥陀三尊種子板碑(「十法仏土中」偈が刻まれる。)

光明を放ち給え フーン



光明真言と
現代語訳

偉大なる印を有する御方よ 宝珠よ 蓮華よ



オン不空なる御方よ 毘盧舎那仏よ
(大日如来)



しゅそんしゅじ わきじ
主尊種子と脇侍種子について

キリーク=阿弥陀如来

サンスクリット語の「アミダーバ(はかり知れない光を持つ者)」、「アミターユス(量り知れない寿命をもつ者)」の音を漢字にあてているが、それぞれ漢訳して「無量光仏」「無量寿仏」とも呼ぶ。西方にある極楽浄土へ導く仏とされる。

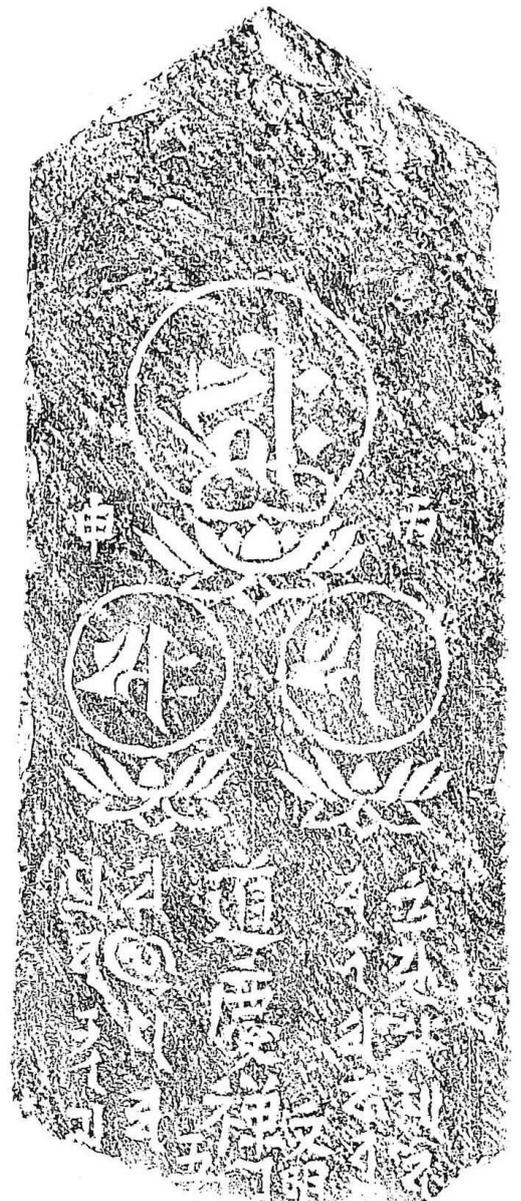
かんのんぼさつ
サ=観音菩薩

「観自在菩薩」とも呼ばれ、「衆生の苦悩を感じること自在なる者」という意味合いをもち、仏教の慈悲の精神を人格化した菩薩である。

せいし
サク=勢至菩薩

『観無量寿経』に「知恵を持ってあまねく一切を照らし、三途を離れしめて、無上の力を得せしむ故、大勢至と名づく」との記述があつて、迷いと戦いの世界の苦しみから知恵を持って救い、その亡者を仏道に引き入れ、正しい行いをさせる菩薩とされる。

文明八年(1476)銘阿弥陀三尊種子板碑(丙申の干支で年号がわかる。主尊がキリーク(阿弥陀如来)、脇侍右サ(観音菩薩)、左がサク(勢至菩薩)である。供養者の法名(道慶禅門)の両脇に梵字で光明真言が刻まれている)



しゃか
バク=釈迦如来

仏教の開祖釈迦族の王子ゴウタマ・シッダールタが悟りを開いた姿。大乘仏教では、仏の本質は、三身にあつて、そのうち真理により現世に姿を現す応身によって衆生を救済するとされる。

もんじゅ
マン=文殊菩薩

インド北部のコーサラ国のバラモンの家系に生まれ、仏典結集にもたずさわった。『維摩経』には、維摩居士に問答でかなう者がいなかった時、居士の病床を釈迦の代理として見舞った文殊菩薩のみが対等に問答を交えたことから、智慧の菩薩とされる。

ふげん
アン=普賢菩薩

世界にあまねく現れ仏の慈悲と理智をあらわして人々を救う賢者である菩薩である。また、女人成仏を説く法華経に登場することから、特に女性の信仰を集めた。密教では菩提心(真理を究めて悟りを求めようという心)の象徴とされる。



元徳三年(1331)銘釈迦三尊種子板碑(主尊がバク(釈迦如来)、脇侍右がマン(文殊菩薩)、左がアン(普賢菩薩)である。「十法仏土中」偈が刻まれる。)

(4) 禅門、禅尼、逆修とは

禅門、禅尼とは

一般的には、居士大姉、信士信女に次ぐ戒名(法名)で、
禅定門、禅定尼の略とされる。在家のままで心静かに仏法
を信じ、頭を剃り修行に努める男子を禅門、女子を禅尼とい
うが、2004年に国立歴史民俗資料館研究報告で発表された
奈良・京都の墓標調査の結果から中世独特の戒名(法名)で
ある可能性が強まった。

月待板碑など結衆板碑には信仰を同じくする一般的な村
人の名前が刻まれるが、そうした仏法を信じ修行に努める庶
民の男子、また同様な女子といった意味で法名として刻まれ
たものであると推察される。また千々和到氏が指摘する中世
後期に板碑が供養塔から墓標化するという性格の変化から事
実上戒名として刻まれたものも少なくないと考えられる。

逆修とは

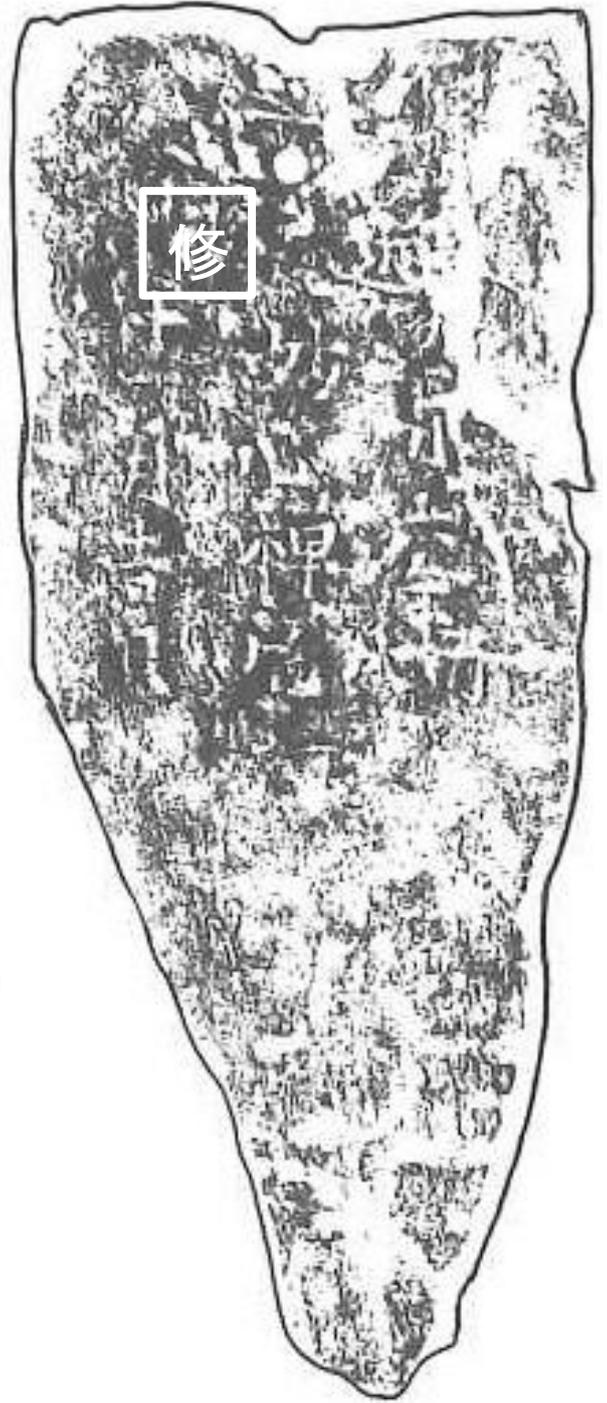
死後の安寧、極楽往生のために生前に自らの手で供養を行
うことをいい、死後に行う追善供養と対になる供養の考え方。逆
にはあらかじめという意味があり、預修とも言う。生前に修する逆
修は功德が大きいと考えられた。平安時代では貴族の慣習だっ
たが、室町時代に庶民にもひろまった。生前に法名や戒名をつけ
板碑に逆修の願意を刻んだ。現在は、「生前に法号を受けること」
の意味に使われることがある。

15世紀の板碑

一部例外はあるものの、板碑の小型化が著しく、高さ40~50
cm、幅15~20cmのものが大多数となり、銘文は、日付を伴う紀
年銘と個人名(法名)の組み合わせで、法名は、〇〇禅門、〇〇
禅尼など四字のものが主流となる。このような個人名板碑は、供養
塔というよりも墓標ではないかと考える研究者もいる。また15世紀
中葉ころから、仏教の教義に基づかない月待や庚申待といった民
間信仰の集団(結衆)による板碑(結衆板碑)が建立されるのがこ
の時期の特徴である。

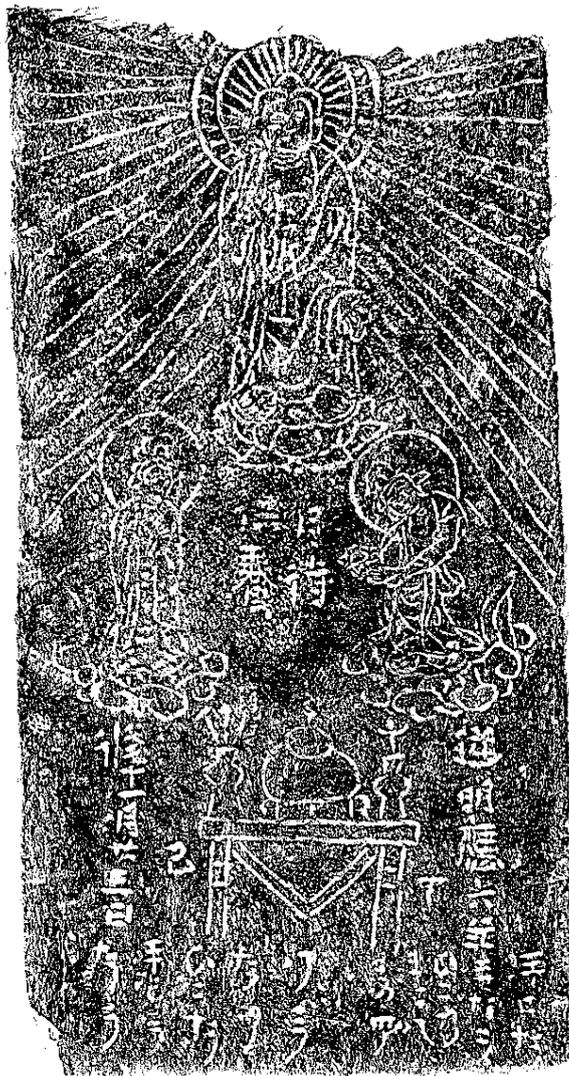
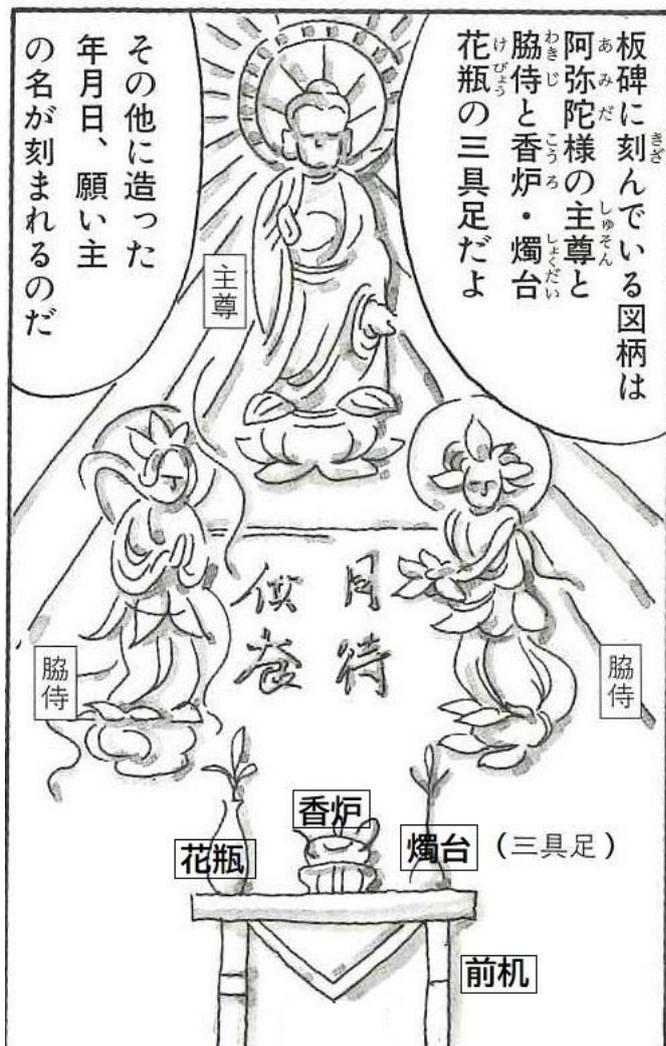
16世紀の板碑

15世紀に現れた二句の偈頌や墓標的なもの、逆修の銘を刻むもの、月待や庚申待などの民間信仰によるものなどが主体としてのこるが、旧上福岡地域では、庚申待板碑はみられず、享祿五(1532)年銘のものが最新となる。市内では市沢共同墓地に所在する天文二十三(1554)年銘のもの(市指定文化財・市内最新の板碑)が最後となる。



大永六年(1526)銘阿弥陀一尊種子板碑
(部分。元号と供養者である妙心禅尼の上
に、「逆修」の銘文が見られる。)

(5) 月待板碑とは



月待板碑に刻まれた図像(主尊と脇侍が梵字ではなく図柄で刻まれ、前机の上に花瓶、香炉、燭台の三具足が載せられ、月待供養の様子が生々しく表現されているのがわかる。石川篤子画『まんが上福岡の歴史』より一部改変)

明応六年(1497)銘月待阿弥陀三尊図像板碑(下福岡共同墓地にある板碑で、「逆修」「月待供養」の銘文とともに月待を行った当時の村人たちの名前が刻まれている。)

月齢二十三日の日に、信仰を同じくする集団(結衆)の人々が、飲食や会話をしながら月の出を待って、月が出たら焼香や読経をして現世や来世の幸福を祈って建立した代表的な結衆板碑で、しばしば「逆修」や「帰命月天子」偈などの銘文が伴う。

紀年銘とともに結衆の構成員(供養者)である当時の村人たちの名前が刻まれ、当時の庶民のいきづかいがうかがわれる貴重な資料である。月待(供養)がどのような場所でおこなわれたかは議論があるが、村堂(村のほこら)などの精神的なよりどころとなる場所で行われたのではないかと推察される。上福岡地域では、下福岡共同墓地のほか城山遺跡、川崎地区で確認されている。また川越市古市場旧在の月待板碑が上福岡歴史民俗資料館でも常設展示されている。

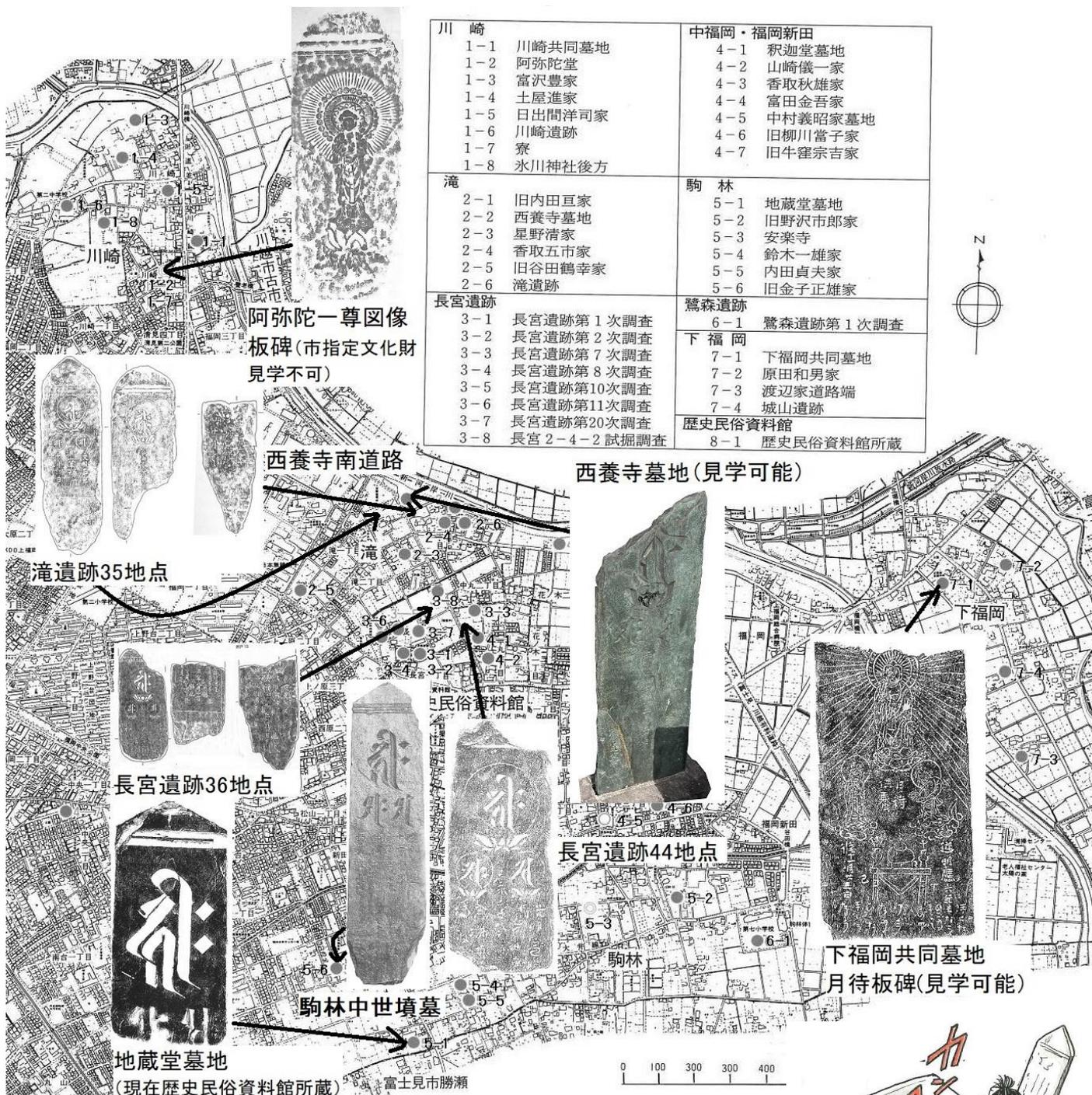
「帰命月天子」偈

全文は「帰命月天子 本地大勢至 為度衆生故 普照四天下」(月天子に帰命し奉る、その本地は勢至菩薩で衆生をすくうために あまねく天下を照らす)で、出典は明らかではないが、「修験常用秘宝集」などにみられるとされる。月待供養板碑に類出する偈頌である。

<<主要参考文献>>

市史調査報告書第18集『上福岡の板碑』上福岡市教育委員会、平成12年
 千々和到『板碑と石塔の祈り』山川出版社、平成19年

市内(上福岡地域)の主な板碑分布図



企画展ミニ展示の予告

伊能忠敬が大井にやってきた(～6月21日)

日本の藍染め、アジアの染織(6月11日～7月10日)

石川篤子画『まんが
上福岡の歴史』より
一部改変)

